

リリース3: ユーザ・インターフェースの実装

市東 亘

平成 30 年 1 月 9 日

目次

1	ベクトルとリストの復習	1
2	第一級関数	3
3	高階関数	3
4	無名関数	4
5	高階関数の応用	5
6	メニューの表示	5
7	変更箇所の分離	6
8	アプリケーション本体	7

1 ベクトルとリストの復習

ベクトルの要素は全て同じ型.

```
v <- 1:5
v
## [1] 1 2 3 4 5
# 全ての要素がより一般的な文字列型に変換される
v[2] <- "あ"
v
## [1] "1" "あ" "3" "4" "5"
```

ベクトルの 2 番目の要素にリストを代入してみる.

```
v <- 1:5
# リストには異なる型を要素に入れられる
lst <- list(a=1:5, b="文字列", c=c("あ", "い"))
lst
```

```

## $a
## [1] 1 2 3 4 5
##
## $b
## [1] "文字列"
##
## $c
## [1] "あ" "い"

v[2] <- lst

## Warning in v[2] <- lst: 置き換えるべき項目数が、置き換える数の倍数ではありませんでした

# v はリストに変換される
v

## [[1]]
## [1] 1
##
## [[2]]
## [1] 1 2 3 4 5
##
## [[3]]
## [1] 3
##
## [[4]]
## [1] 4
##
## [[5]]
## [1] 5

str(v)

## List of 5
## $ : int 1
## $ : int [1:5] 1 2 3 4 5
## $ : int 3
## $ : int 4
## $ : int 5

```

上のエラーは、代入先 (v[2]) が1つの要素であるのに対し、代入しようとしているリスト (lst) が3つの要素を持っているため、数が合わないというエラーが出ている。ここでは lst の1つ目の要素である lst\$a だけが代入される。

上の代入でリストに変換された v には何でも格納できる。もう一度、2番目の要素にリストを代入してみる。

```

v[[2]] <- lst
v

## [[1]]
## [1] 1
##
## [[2]]
## [[2]]$a
## [1] 1 2 3 4 5
##
## [[2]]$b
## [1] "文字列"
##
## [[2]]$c
## [1] "あ" "い"
##
##
## [[3]]

```

```
## [1] 3
##
## [[4]]
## [1] 4
##
## [[5]]
## [1] 5
```

2 第一級関数

関数はデータと同じように、変数に代入できる。以下の `f` は3つの関数を要素に持つリスト。

```
foo <- function() { cat("関数 foo\n") }
bar <- function() { cat("関数 bar\n") }
who <- function(name) { cat("関数", name, "\n", sep="") }
# c() を使っても自動的にリストに変換されて格納される。関数はそれぞれが独自の型を持つ
f <- c(foo, bar, who)
str(f)

## List of 3
## $ :function ()
## .. attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 1 8 1 44 8 40 1 1
## .. .. attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b6f1910>
## $ :function ()
## .. attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 2 8 2 44 8 40 2 2
## .. .. attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b6f1910>
## $ :function (name)
## .. attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 3 8 3 63 8 59 3 3
## .. .. attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b6f1910>
```

`f` の要素にアクセスし、通常関数呼び出しと同じように `()` をつけると、関数を起動できる。

```
f[[1]]()
## 関数 foo

f[[2]]()
## 関数 bar

f[[3]](" 3rd function!")
## 関数 3rd function!
```

3 高階関数

第一級関数はデータと同じように扱えるため、「関数を引数に取る関数」や「関数を返す関数」を作ることができる。

高階関数の例 1.

- `lapply(x, fun)` は、リストやベクトルなど連続する要素を持つ `x` の各要素に関数 `fun` を適用する。
- `lapply()` は、 $fun(x_1), fun(x_2), \dots, fun(x_n)$ の結果をリストにして返す。

```
# 引数を 2 乗して返す関数を定義
sqr <- function (x) {
  x * x
}
```

```
v <- 1:4
lapply(v, sqr)

## [[1]]
## [1] 1
##
## [[2]]
## [1] 4
##
## [[3]]
## [1] 9
##
## [[4]]
## [1] 16
```

高階関数の例 2.

- `sapply(x, fun)` は、`x` の各要素に関数 `fun` を適用して、可能な限り simple な形（同じ型ならベクトルや配列）にして返す。

```
v <- 5:20
sapply(v, sqr)

## [1] 25 36 49 64 81 100 121 144 169 196 225 256 289 324 361 400
```

4 無名関数

高階関数の例で `sqr()` 関数を定義したが、`sqr()` 関数を使うのが 1 回だけの場合、わざわざ `sqr` という名前をつけるのはもったいない。「もったいない」というのは、他の用途で `sqr` という名前が使えなくなるからだ。例えば、以下のように他の用途に使用すると、`sqr()` 関数が上書きされてしまう。

```
sqr <- function(x) {
  x * x
}
sqr <- 5 # sqr は関数ではなく 5 を保持する変数になる！
```

これまで関数名を書いていたところには、関数定義をそのまま書ける。

```
lapply(1:5, function(x) { x*x })

## [[1]]
## [1] 1
##
## [[2]]
## [1] 4
##
## [[3]]
## [1] 9
##
## [[4]]
```

```
## [1] 16
##
## [[5]]
## [1] 25

# 複数行に書いても良い
sapply(2:25, function(x) {
  x * x
})

## [1] 4 9 16 25 36 49 64 81 100 121 144 169 196 225 256 289 324
## [18] 361 400 441 484 529 576 625
```

このように名前のない関数を「無名関数 (anonymous function)」と呼ぶ。

5 高階関数の応用

- リストの中からある要素だけを取り出してベクトルに結合する。

```
doTask1 <- list(title="新規カード",
  fn=function() {
    cat ("処理: 新規カード作成中.....\n")
  })
doTask2 <- list(title="テスト開始",
  fn=function() {
    cat ("処理: テスト中.....\n")
  })
doTask3 <- list(title="成績表示",
  fn=function() {
    cat ("処理: 成績表示中.....\n")
  })
# doTask は list なので, list に格納する
tasks <- list(doTask1, doTask2, doTask3)
str(tasks)

## List of 3
## $ :List of 2
## ..$ title: chr "新規カード"
## ..$ fn :function ()
## .. ..- attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 2 20 4 17 20 17 2 4
## .. .. ..- attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b7afc78>
## $ :List of 2
## ..$ title: chr "テスト開始"
## ..$ fn :function ()
## .. ..- attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 6 20 8 17 20 17 6 8
## .. .. ..- attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b7afc78>
## $ :List of 2
## ..$ title: chr "成績表示"
## ..$ fn :function ()
## .. ..- attr(*, "srcref")=Class 'srcref' atomic [1:8] 10 20 12 17 20 17 10 12
## .. .. ..- attr(*, "srcfile")=Classes 'srcfilecopy', 'srcfile' <environment: 0x7f8f2b7afc78>
```

全タスクの title だけ抜き出す。

```
sapply(tasks, function(x){ x$title })

## [1] "新規カード" "テスト開始" "成績表示"
```

6 メニューの表示

- CUI (キャラクタ・ユーザ・インターフェース)
- メニューを表示し、プロンプトでユーザに番号を選択してもらう。
- メニューを表示するには `menu()` 関数を使う。
- `menu()` は選択された番号を返す。0 が選択されると終了。

```
menu(c("新規カード", "テスト開始", "成績表示"))
##
## 1: 新規カード
## 2: テスト開始
## 3: 成績表示
##
## Selection: 1
## [1] 1
```

CUI の作り方

- (1) メニューとプロンプトを表示。
- (2) 入力された番号に応じて、関数を呼び出し処理する。

```
doTask1 <- function() {
  cat ("\n\n 処理: 新規カード作成中.....\n\n")
}
doTask2 <- function() {
  cat ("\n\n 処理: テスト中.....\n\n")
}
doTask3 <- function() {
  cat ("\n\n 処理: 成績表示中.....\n\n")
}
tasks <- list(doTask1, doTask2, doTask3)
```

```
while(TRUE) {
  choice <- menu(c("新規カード", "テスト開始", "成績表示"))
  if (choice == 0)
    return()
  tasks[[choice]]()
}

## 1: 新規カード
## 2: テスト開始
## 3: 成績表示
##
## Selection: 2
##
##
## 処理: テスト中.....
##
```

練習問題

- 上のメニューに、自分の好きな処理名でタスクを追加せよ。

7 変更箇所の分離

- メニューを追加するごとに、複数箇所を変更するのはバグを招く。
- 変更箇所を分離することによって、プログラム修正時の変更を**局所化**する。
⇒ 仕様変更に強いプログラムになる。
- メニューの文字列と処理関数を一緒に管理した方が、メニューを追加するときに便利。
- タスク処理の関数と、メニュー文字列をリストにパッケージ化。

```
doTask1 <- list(title="新規カード",
               fn=function() {
                 cat ("\n\n 処理: 新規カード作成中.....\n\n")
               })
doTask2 <- list(title="テスト開始",
               fn=function() {
                 cat ("\n\n 処理: テスト中.....\n\n")
               })
doTask3 <- list(title="成績表示",
               fn=function() {
                 cat ("\n\n 処理: 成績表示中.....\n\n")
               })
# doTask は list なので、list に格納する
tasks <- list(doTask1, doTask2, doTask3)
```

```
# 全タスクの title だけ抜き出す。
menu.items <- sapply(tasks, function(x){ x$title })

while(TRUE) {
  choice <- menu(menu.items)      # <-- 変更点
  if (choice == 0)
    return()
  tasks[[choice]]$fn()          # <-- 変更点
}
```

こうすると、新しいメニューを追加しても、メニュー表示ルーチンは一切変更しなくて済む。

練習問題

- 上のメニューに、4 番目のタスクを追加せよ。

8 アプリケーション本体

メニュー表示のルーチンを関数にまとめれば、次回以降、`run.app()` で起動できる。

```
run.app <- function() {
  # タスクを登録
  tasks <- list(doTask1, doTask2, doTask3)
  # 全タスクの title だけ抜き出す。
  menu.items <- sapply(tasks, function(x){ x$title })

  while(TRUE) {
    choice <- menu(menu.items)
    if (choice == 0)
      return()
    tasks[[choice]]$fn()
  }
}
```